

「わたしとは違う」

アモス書 9章 13～15節

聖学院大学 心理福祉学科長 田村 綾子

13 見よ、その日が来れば、と主は言われる。耕す者は、刈り入れる者に続き、ぶどうを踏む者は種蒔く者に続く。山々はぶどうの汁を滴らせすべての丘は溶けて流れる。14 わたしは、わが民イスラエルの繁栄を回復する。彼からは荒らされた町を建て直して住み、ぶどう畑を作って、ぶどう酒を飲み、園を造って実りを食べる。15 わたしは彼らをその土地に植え付ける。わたしが与えた地から再び彼らが引き抜かれることは決してないとあなたの神なる主は言われる。

私はよく言い訳をします。立派なことをしている人を見たりすると「わたしとは違う」と。頭の良さが違う、体力が違う、持っているお金も生まれも違う、だから私にはそこまでできない、という言い訳です。そんな考え方をすることはありませんか？

さて、私は聖学院大学の教員として8年目を迎えました。その間に多くの入学者と出会い、卒業生や退学者を見送り、そしてその後もつながりを持っている人もいます。ありがたいことだなと思います。今日は、みなさんの先輩たちとの出会いから私が考えたり、感じたことをお伝えします。ただ、プライバシーがあるので、お名前や性別は伏せて、Aさん、Bさんとします。

Aさんは、卒業と同時に社会福祉士の国家資格を取りましたが、福祉職場ではなく一般企業に就職しました。ところが、そこはブラック企業でした。残業してもお金は出ない、就職面接で聞いた話とは異なる営業の仕事をさせられる、成績が悪いと叱られる…。慣れない一人暮らしにも苦労したようで、私のところへ相談に来た時は、卒業後数か月だというのにすっかり疲れ果てていました。

キャリアサポート課の職員さんと相談のうえ体調不良の診断書を出すことにして、どうにか無事に会社を退職しました。しばらく実家で心身の疲れを癒した後、キャリアサポート課の紹介で地元の求人情報に応募しました。国家資格を活かした社会福祉士として就職し、今は中心的な役割を果たしています。ブラック企業の職場で「嫌だ」と感じてそれを言えたこと、「自分を助けたい」と自分で思えたことがAさんの人生を切り開いてくれたと思います。

Bさんは「人の役に立ちたい」という希望をもって入学しました。ところが、2年生の途中から欠席がちになり、成績不良のため呼び出して、私は何度か話をしました。そのたびにBさんは頑張ると言いますが、アルバイトで始めた調理の仕事にやりがいを見出し、大学の勉強よりも面白みを感じていたようです。その一方で、友人たちから落ちこぼれていくことに負い目を感じ、大学への足は遠のいていきました。バイト先では責任感のある働きぶりが次第にあてにされるようになり、上司からは調理師免許を

取ることを勧められたそうです。Bさんは、その勉強に専念したいと言って退学を決意したことを報告に来ました。それまでとは違って何かふっきれたような爽やかなBさんの様子に、私は引き留めることはせず、応援するねと伝えて笑顔で別れました。

それから1年ほど経って、Bさんは正社員で雇ってもらえることになったと知らせてきてくれました。入学当初から「人に尽くしたい」という思いをもっていたBさんは、福祉の仕事とは別の形でその思いを達成したのです。

Cさんは小学校でいじめにあい不登校でした。精神的に不安定になることもあって通院していましたが、薬を飲むことは「自分の病気がまだ治っていない」と思うことにつながり、けれども薬を飲まない不安定になる、という悪循環を繰り返していました。学内で楽しそうにおしゃべりするグループに嫉妬心から大声で怒鳴ってしまったこともありました。

そんなCさんは、人より長くかかりましたが、笑顔で大学を卒業しました。支えたのは仲間の力です。歌が好きで聖歌隊の活動を始めたことが変化のきっかけでした。自分の得意な力を発揮できる場を見つけたことや、仲間ができたことによって、病気があっても「わたしはわたしだ」と実感できるようになり、それが自信につながったのです。仲間を持つこと、自分らしくいられる場を見つけることがCさんの生き方を変えてくれました。

Dさんは入学して半年で大学を辞めていきました。元気に登校していたのは1年生の5月くらいまでです。退学理由を尋ねると、最初は「勉強意欲の消失」と言っていたのですが、実際はガンの治療をしている母のことが心配で、働いて家族を支えたいんだ、という思いを語ってくれました。隣で聞いていたお母様は涙を流されましたが、Dさんは、介護の仕事に関心があることを本学科に入学して気づいた、高校時代にアルバイトをしていた施設でもう一度働こうと思う、と言います。

「家族の一員として今の自分がすべきことは、お金を稼いで母の治療を支えること、そのためにヘルパーの資格を取ろうと思う、もしまた勉強したいと思ったらそのとき大学に戻る。」それがDさんの決断でした。私はDさんとお母様の健康をお祈りして見送りました。

Eさんは留学生で、アルバイトをしながら社会福祉士の資格取得を目指していました。両親の愛に恵まれず、妹をねたむ気持ちを証したこともあります。卒業後は児童養護の仕事につきましたが、その職場では子どもたちの人権が守られていないと感じるようになったといいます。「もっと子どもたちの話を聞きたい」「子ども一人ひとりにあった支援をするべき」と思いながらも、忙しかったり他の職員から「そんなに丁寧にやっていたら仕事が終わらない」と注意されることもあったそうです。

人一倍頑張っていたEさんですが、風邪を引いたり体調を崩すことが多くなり、相談を受けた私は退職を強く勧めました。退職すると住む場所にも困るので、Eさんは労働基準監督署に相談し、職場から退職の保障を間違いなく受け取る手立てを講じていました。そして、新たにキリスト教主義の児童施設にめぐり会い、強い希望をもって再就職しました。

Eさんは「本当に神さまが導いてくださったんです」と目を輝かせて報告してくれました。いまでもその

施設で社会福祉士として元気に働いています。在学生に「望みを捨てなければ神さまは必ず助けてくださる」というメッセージも届けてくれました。

いかがでしょう？ご紹介したお一人おひとりが、それぞれの道を歩んでいることが伝わったと思います。誰もが「わたしとは違う」人であり、個性、賜物、つまり神さまから与えられた尊い力を持っているのです。そして、悩みや失敗、挫折もあるけれど、やり直しの道へと導かれています。そこには神さまの恵みがもちろんあります。ただ、自分が何をしたいかとしっかり向き合ったり、嫌なことは「いやだ」とはっきり自覚する、そして人を頼る、そういう力のある人たちだというのが私の印象です。

今日の聖書箇所を書いた人は羊飼いで農夫でした。神さまの言葉を伝えるように命じられても、周囲がすぐに耳を貸したかどうかはわかりません。でも、大切なことをたくさん述べています。それは当時の権力者への批判もあり、何が正しくて何が間違っているか、その基準をもっていなくては言えなかったと思います。基準とは、法律や制度よりも深い真実です。そして、そういう声を聴く人のことを神さまは土地に根付かせると約束してくださっています。

今日の奨励にあたり、アドミッション課、教務課、学生課に尋ねたところ、この 30 年間で本学の入学者総数は 17,300 人近くいて、既に卒業した人も 13,000 人にのぼるそうです。それだけ多くのみなさんの先輩が社会に出ていますし、その一人ひとりを支えた教職員が大学にいます。

先輩たちは、それぞれの「自分らしくいられる場」に根付いて生きています。大学に働く者としてとても誇らしいことです。聖学院大学の 30 年間の歴史的なつながりを信じ、心強い存在として頼りにしましょう。そして、そんな先輩たちの後にくみみなさんにも、この大学で誇りをもって学び、暮らしてほしいと願います。

2018 年 10 月 9 日 聖学院大学 全学礼拝シリーズ礼拝「創立 30 周年を覚えて」